### 九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

廃仏毀釈の影響を受けた英彦山修験道美術における 復原的考察: 豪潮宝篋印塔、三所権現御正体、不動 明王立像

知足, 美加子 九州大学大学院芸術工学研究院: 准教授

https://hdl.handle.net/2324/7172153

出版情報: Japanese mountain religion. 62, pp.49-67, 2018-10-19. The Association for the Study of Japanese Mountain Religion

バージョン: 権利関係:

# 廃仏毀釈の影響を受けた英彦山修験道美術における復原的考察

——豪潮宝篋印塔、三所権現御正体、不動明王立像-

## 知 足 美加子

はじめに

では、英彦山は、明治維新を乗り越える胆力を喪失したと考察が、大き山は、明治維新を乗り越える胆力を喪失したと考察派の小倉藩に抗することとなった。同年、小倉藩から長州尊王攘夷される。座主家族は釈放されたものの、首謀者とされた十一人は囚われたまま四年のうちに獄死した(脱出した三名を除く)。中枢を担う指れたまま四年のうちに獄死した(脱出した三名を除く)。中枢を担う指導者達を失った英彦山は、明治維新を乗り越える胆力を喪失したと考察者達を失った英彦山は、明治維新を乗り越える胆力を喪失したと考えられる。

と共に仏像類を破壊し、あるいは火に投じた。本論で取り上げる修験が、神兵独・仏像・仏具を悉く破壊しようとした。幕末の義僧殉は、寺院・堂塔・仏像・仏具を悉く破壊しようとした。幕末の義僧殉難の経緯が、神兵を勢いづけていたのだろう。明治六年、禰宜となっ難の経緯が、神兵を勢いづけていたのだろう。明治六年、禰宜となっ難の経緯が、神兵を勢いづけていたのだろう。明治六年、禰宜となっ難の経緯が、神兵を勢いづけていたのだろう。明治六年、禰宜となっ難の経緯が、神兵とは、一八六八)香春寺社から神仏分離の布達が英彦慶応四年(明治元年、一八六八)香春寺社から神仏分離の布達が英彦

先行研究からまとめると以下のようになる。文久三年(一八六三)、攘

英彦山における廃仏毀釈の経緯について、高千穂有英、広渡正利の(4)

日田出身の尊王攘夷派の長南梁・光太郎(三州)親子からの思想的な影夷派の朝廷から国家安泰の祈願を命じ勅使が英彦山に下向する。豊後

道美術はこの時期に隠され、 あるいは改変されたものである。

刷などのデジタル技術を組み合わせ、文化財復原を試みる。制作者と 次に彫刻家である筆者の伝統的彫刻技術と、レーザー加工、三次元印 よる3D(three-dimensional)データ化や拓本によって形状分析を行う 明王立像》を取り上げる。研究方法は、まず各対象を三次元計測に 山内の石造 対象として、英彦山修験者が文化財改変に関わったと考えられる英彦 とで、修験道文化の輪郭を浮かび上がらせることを目的とする。研究 修験道美術表象の内容を明らかにし、容認と否定の境界を精査するこ しての観察や、 このような背景を踏まえ、本研究では、明治期に否定された英彦山 《宝 篋 印塔》、銅製《彦山三所権現御正 体》、木彫《不動等きょういんとう プロセスの考察・実践を通して新たな知見を得たい。

## 章 英彦山宝篋印塔

## 豪潮寛海の宝篋印塔

る。

塔の名は、内部に「宝篋印陀羅尼」を納めたことに由来する。豪潮寛の石段の中ほどに、高さ約八・二mの大型の宝篋印塔がある。宝篋印 海(一七四九~一八三五年)が文化十四年(一八一七)に制作したもので 殿まで続いており、その左右には坊ぼう(山伏住居)が並んでいる。こ の宝篋印塔の建立を大願し、 豪旭のあとを受けて玉名市天台宗寿福寺の住職となった。八万四千基 英彦山の中央には約八六五mの石段(大門通り)が銅の鳥居から奉幣 豪潮は熊本県玉名市の専光寺に生まれ、比叡山にて修行し、師 以来九州北部を中心に立塔している。七(8)



主・徳川斉朝の病気を加持した功績に

三歳(数え年)の頃、

尾張(愛知県)藤

豪潮《阿吽》大興善寺

に留まった。豪潮の書は、肥後の三筆より、請われて尾張の岩窟寺や長栄寺 格天皇から賜った唐墨を「終身の用に いる(図1)。淡墨の書が多いのは、光 たりとした自由闊達な線を特徴として の一人として高く評価され、太くゆっ

方」「不空成就如来(アク)-北方」(大日如来(バン)-中央)を配してい ン)-東方」「宝生如来(タラーク)-南方」「阿弥陀如来(キリーク)-西 と方位を表しており、 宝篋印塔の塔身の梵字は金剛界五仏 「阿関如来(ウ

といわれている。

供せん」と惜しみながら使用したため

県·西巌殿寺(一八〇五年)、長寿寺(一八一〇年)、佐賀県·大興善寺 するのに功を奏している。豪潮が制作した宝篋印塔について、 面が凸型)していることが多い。これは豪潮の書の豊かな質感を表現 (一八〇七年)、春徳寺(一八一三年)、清水寺(一八〇一年)、最教寺 (一八〇二年)、長崎県・一瀬(現在は本河内、 豪潮の石造宝篋印塔の梵字(金剛界五仏種子、 鋭い薬研彫り(断面がV字の陰刻)ではなく、太めの線を陽刻(断 一八一一年)、禅林寺 宝篋印塔陀羅尼種子 熊本



図2 豪潮《宝篋印塔(福岡県、長崎県)

うかがえる。

れており、天台宗の灌頂を受けた豪潮が宗派を問わず寄与する姿勢がた仏像等)が寄せられている。彼の宝篋印塔は様々な宗派寺院に配さるものと推測される。この塔の周囲には、複数の破損仏(首が折られ

豪潮は、小塔を含めると二千基余りを制作し、宝篋印塔陀羅尼を書あるいは塔身に線刻して収めたとされる。現存する高さ八 m前後の大力の宝篋印塔は、西巌殿寺、本河内、英彦山のものだけである。これは廃仏毀釈だけではなく、神仏分離令と修験道禁止令の影響を強くでけ、改変を加えなければ塔を存続できない事態に英彦山が直面したことを示している。復原に際して、四基のうち英彦山宝篋印塔に意匠が相似し、且つ破損が少ない本河内宝篋印塔を参考にして復元的考察を行う。

県・総持寺、一八一八年)を調査した(図2・3)。廃仏毀釈による移

(一八〇一年)、観音寺(一八一七年)、愛知県・萬松寺(現在は神奈川

飾りは欠損しており、不規則な断面から察するに廃仏毀釈の破壊によな。 繰や自然災害によって部分的に破損しているものが多い。禅林寺の隅祭や自然災害によって部分的に破損しているものが多い。禅林寺の隅

は各地域の石工に委ねていたことがうかがえる。英彦山宝篋印塔の場じ豪潮の設計であっても、地域によって隅飾りや反花、基礎などのじ豪潮の設計であっても、地域によって隅飾りや反花、基礎などの宝篋印塔施工を担当した石工の技術や嗜好が反映されたものか、同宝篋印塔施工を担当した石工の技術や嗜好が反映されたものか、同

九六)に「天台修験別格本山」としての地位が確立している。 治独立の気風により、 彦山は中世より守護不入の治外法権的な組織を有し、 たと考えられる。 英彦山宝篋印塔の構造は、上から「相輪(1宝珠、 「三千八百坊」といわれ、 施工や改変に直接携わったのは、 英彦山宝篋印塔の改刻 英彦山内の修験者であろう。 2請花

4請花b、 5伏鉢)」「笠(6隅飾)」「塔身(7月輪梵字)」「請 山内に宗教美術制作を担う山伏たちが在住して 総人口が約三千人と賑わっていた。自 としての地位が確立している。江戸期 元禄九年(一六 3九 座



図3 豪潮《宝篋印塔(熊本県、佐賀県、神奈川県)》

石基礎)」(図4)となっている。 (8請花c)」「9基壇」「基礎(10反花、 11 基礎 a 12基礎b、 13自

種子(シッチリア)を削って「献燈」の二字を彫り付けていること。二 所について示されていることが多い。 である(図5)。宝篋印塔を燈籠に改変するために、 つ目は、 英彦山の宝篋印塔に改変について、 反花に亀甲紋を彫りつけ、 火袋を作っていることも認識されてきた。 廃仏毀釈による破壊を免れたこと これまでの文献では以下の二か 一つ目は、 基壇の宝篋印陀羅尼 塔身の月輪梵字を

筆者は、

英彦山宝篋印塔と他の地域のものを比較し分析する中で、

図 4 英彦山宝篋印塔各部名称



英彦山宝篋印塔と本河内・最教寺宝篋印塔の比較

角形と円形)で彫り抜かれ、

また火袋に改変された塔身に

ついても、二面は違う形(四

荘厳する象徴的所産である。(19)おいては、仏の功徳を暗示・

ある珠玉」とされる。仏教に の物を生ずること意の如くで

(図6)。

如意宝珠とは「種々

図 5 四年前に指摘していることだ が、基壇の「経一云」から始 解明されていない奇妙な点が 研究は見当たらない。さらに 理由について論じられた先行 残りの面は彫り抜かずに半月 火袋改変の文化的根拠や、す 形と三角形を陰刻している。 ての面を彫り抜かなかった これは宇野廉太郎が六

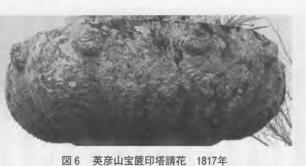
が彫られていることである それは請花でに「如意宝珠」 たな改変部分に気が付いた。 これまで見落とされてきた新 まれた銘文は以下の通りである。 まる経文の要約が、改刻されずに残されていることである。基壇に刻(3)

賓篋印陀羅尼、故納此塔万室、 後生極樂、 有衆人、或見塔形、 草摧破」〈向かって左〉「感障覺悟、 切如來神力、加持祈禱、若有鳥類畜類蚖蛇之類、 〈向かって右〉「末法逼迫之時、佛法當隱然、 以二是事一故、 或聞其名、 □聲思念莫忘、三世諸佛、 罪障悉滅、 説萬分之一、 經之要文記」〈背面〉「非是豊財園 无明忽入佛家、 所求如意、 猶是塔堅固不滅、 汝等信奚奉行、 暫來塔影及踏場 态領法財、 全身舎利、 現世安穩、

況

銘文の向かって右面(図7)には 香語 文化十四丁丑歳夏 一末

いる。 示す重要なものである。しかし明治期 これらは宝篋印塔立搭の仏教的意義を を納めていることが明記されている。 身舎利の功徳を集めた賓篋印陀羅尼 うに不滅である」、およびこの文章が 法窮迫の時、仏法は隠れるようである 経文の要約」であることが記されて 如来の神力によって、この塔のよ 左面には、この塔が「釈迦の全



右

重遠 即今涌出古楓前

十方諸佛

右摘

歸二斯塔一 末法燈明幾萬年



他の部分を改刻

にそれを残し、

したのは何故だ

理由を考察した れた表象とその 的として排除さ もしくは修験道 析し、仏教的、 な改変箇所を分 ろうか。具体的

紋が彫り込まれている。 現しない繰形座なので最教寺のものと比較)複弁花弁の一層目に亀甲 間に如意宝珠を彫っている。5、宝篋印陀羅尼種子を削り、行書体で が彫りつけられている。うち四角と円は火袋として彫り抜かれている。 分を以下の六か所に特定した。 1、 た四角形を彫りすぼめ、 一献灯」の二文字を彫りつけている。6、(本河内の反花座は花弁を表 主に本河内宝篋印塔と比較し、英彦山宝篋印塔の改変および破損部 請花でを花弁の凹部を頂点とする曲面に再彫刻している。主弁の 三・四番目の間隔が詰まっている。3、 正面から右回りに 相輪の宝珠の突起部分の紛失。2 「四角、 塔身は角が装飾され 半月、三角、 円

六か所の改変についての考察は以下の通りである。

空)を思想的根拠として検討した。密教における五大と五形と五方(地 燈籠は、日光の入る東側に円形、 が彫り付けられている。 びつきから英彦山の塔身をみると、方位と形が一致しない。再考した ことになり、 る場合がある。この塔は南方を向いているため、 か外に膨らんでおり、 のか)四角形に一段彫りすぼめ、その面に「四角、半月、三角、円」 るために月輪梵字は削られている。その塔身は、(火袋を表現したも 如来(南)、阿弥陀如来(西)、不空成就如来(北)」の種子が豪潮の書体 2、明治期に、英彦山の塔は一度解体して改変を行った。そのため接 を曲面に仕上げており、 1、尖頂宝珠の造形は、 を配していることである(図8)。このような燈籠は他に見当たらない は西方に位置している。また正面に火袋の格子である四角形を配する で月輪に陽刻されている。一方、英彦山宝篋印塔は、神道の燈籠とす 3、本河内宝篋印塔の塔身は正面から右回りに「阿閦如来(東)、宝生 合部である九輪の第三・四番目が損傷したと考えられる。 宝珠を五大思想の〈団〉に改刻したもの」と筆者は推測する。 くは蓮華の蕾を祖型にしたなど諸説ある。英彦山宝篋印塔は宝珠上部 (図9)。そこで筆者は、三角形の意匠について、五大思想(地水火風 四角-東、水-円-西、火-三角-南、 燈籠の体を成すといえる。不思議なのは、背面に三角形 ここに月輪の円が彫られていたことがわかる。 正面の一 宝珠の功徳を表現する火炎光背が発達、もし 尖頂部を意図的に削ったことがうかがえる。 月光の入る西側に半月形を彫り付け 段目の四角形の辺の中央部が僅かだ 風-半月-北、空-宝珠-中央)の結 円形は東方、半月形



英彦山宝篋印塔塔身(北 面) 1817年



西巌殿寺内荒神神社燈籠 図 9 制作年不明

連を容易に悟られない工夫を施したレイアウトである。 にある三角形は最も見えにくい位置に配されている。五大思想との関 ずれている点について納得がいく。燈籠の火袋として彫り抜かれた正 慮したと仮定すれば、背面の三角形の輪郭が曖昧、 と配置した、と筆者は推測した。その意図を簡単に悟られない様に配 回りに地(四角)、水(円)、火(三角)、風(半月)、空(団 示させる」ものとしたかったのではないか。五大として、正面から左 らはこの塔を単なる燈籠ではなく、 気づいた。 一の四角と円の面は、参道の参拝者からの視認性が高い。一方、 仏そのものの表象と関連付けること自体が誤りであることに 自ずと円と半月の位置は決まっていた。 改刻時の英彦山山伏は、この塔を燈籠とみなすことを重視 造形として「仏教の五大思想を暗 しかしながら、 かつ中心が僅かに ・中心の宝珠) 背面 彼

している。高所にあるため気づきにくいが、主弁の間に八つの如意宝

花弁の凹部だった部分を頂点とする曲面に彫

り直

連は薄い。 かがえる。

ここでも否定されているのは蓮華の表象である。英彦山の

造形的に亀を連想できるとはいえ、蓮華を亀に置

なっている。繊細な線で曲面上に美しく彫られており、

亀甲は万歳の寿齢を祝う吉祥文様であり、

仏教思想との関

高い技術がう

に亀甲紋が彫り込まれている。二重の亀甲の稜線は、僅かに浮彫りと

反花は量感に優れ、

塔身の請花は、

5 灯 定よりも、 弁の反花座をもつ最教寺宝篋印塔と比較した。英彦山のものは花弁 本河内の塔の反花座は、花弁を表現しない繰形座である。そこで

わらず、 印塔を燈籠とみなすための決定的な改刻である。 除した、と筆者は考えるようになった。つまり彼らは仏教の教義の否 で英彦山山伏達は「仏教を荘厳する(仏教の優位性を示す)表象」を排 であることがわかる。しかし不明なのは、蓮華を否定しているにも関 容されたのであろう。ここでの山伏の改刻の線引きは わかる。宝珠は神道の意匠としても用いられるため、 ら宝珠と花弁を組み合わせていたとしたならば、神仏融合の造形とし 珠がある。三重の条線が丁寧に彫られており、 筆とは考えにくいが、彼の書体に倣ったものであり達筆である。 て珍しいものである。主弁間の細い尖形花弁から如意宝珠を彫り直す は困難であり、改刻に携わった石工(山伏)の彫刻技術が高いことが の二文字を陰刻している。豪潮は一八三六年に逝去しており彼の 宝篋印陀羅尼種子の陽刻部分を削り、 基壇にある仏教経文の要約は削らなかったことである。 権威・価値を荘厳する表象に留意していたと推測される。 勢いのある行書体で「献 形も美しい。 廃仏毀釈時も許 「蓮華」の意匠 改刻前

き換えるという発想力には驚かされる。

できる。修験道や仏教的教義を深く理解する修験者には、 宝珠」、「亀甲紋」を彫り付けている。請花の如意宝珠に関しては、新 山伏達は仏教・修験道不滅を祈り、後世の衆徒が読み解くためヒント いることは、神兵(改革主義の青壮年)の暴挙への対抗策とみることも 造形の中に巧みに取り入れている。視認性の高い部分のみを改変して れる。さらに、この塔が仏教に帰依するものであること示す暗示を、 火袋でありながら「仏教の五大思想を暗示させる意匠」を用いたこと しい発見であった。英彦山山伏の特別な意図が反映されている点は、 ることが明らかになった。代わりに「献燈」の文字や「火袋」、「如意 陀羅尼種子や金剛界五仏)と「蓮華」の表象が積極的に否定されてい を宝篋印塔の造形に託したのである 仏教経文要約を彫り付けた部分」を残したこと」である。これらを 以上をまとめると、英彦山の宝篋印塔の改刻では、「種子」(宝篋印 この塔が仏教遺物であることが理解されたことであろう。当時の 「仏教の権威や価値を荘厳する表象」を中心に改刻したと推測さ 一切如來神力」の文字や、「五大思想」を読み解くことがで 明治期の英彦山山伏は、 「仏教の教義そのもの」ではな 「猶是塔堅

# 宝篋印塔の月輪梵字に関する考察と復原

の宝篋印塔との比較考察を行う。 ことから、 英彦山宝篋印塔の塔身から消失した種子を特定するために、 方位に対する意識は高かったと考えられる。豪潮作の宝篋 豪潮は天台密教の宿曜に明るかった 他地域

> 潮は ない。正面には南方を表す「宝生如来種子」が蓮華座の上に刻まれて れているもののひとつに、大興善寺宝篋印塔がある。この塔は宝篋印 印塔の中で、廃仏毀釈や区画整理で移築されずに建立時のまま維持さ 陀羅尼種子が刻まれている部分が巨岩であり、破壊や移築をされてい 篋印塔は正面より、 南面北座説 実際の方位も正確に南を向いている(図10)。この事実から、豪 」を根拠として立塔していたと筆者は推定する。宝 背面の種子が最も重要なのである。

れている。この復原の配置だと、尊格の高い北を南から遥拝する形と 英彦山の北岳、中岳、南岳の三岳うち、最も尊格が高いのは北岳とさ 如来(アク)、向かって左に西方の阿弥陀如来(キリーク)を配置した。 倣い、英彦山宝筺印塔の種子想定として正面に南方の宝生如来(タラ 英彦山の塔の正面は、 仏の種子の配置は、実際の方位を重んじていると考えられる。 ク)、向かって右に東方の不空成就如来(ウン)、背面に北方の阿閦 英彦山宝篋印塔も建立から移築をしていないため、塔身の金剛界五 大興善寺と同じく南を向いている。大興善寺に 現状の



大興善寺宝篋印塔塔身 図10 1802年

る(図11、

来を円(日光)に、 向かって右の東の阿閦如 なる。また廃仏毀釈後、 とに対しても整合性があ 半月(月光)に改刻したこ て左の西の阿弥陀如来を 12 向かっ

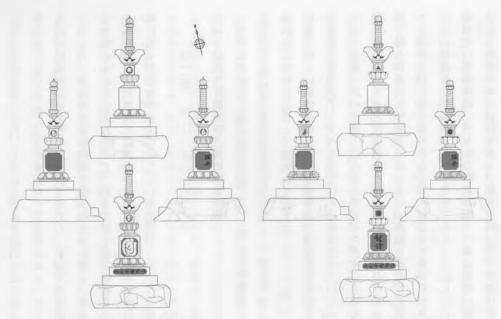


図12 英彦山宝篋印塔復原想定図

図11 英彦山宝篋印塔現状

データ化によって、各スケールの計測、上部や直下からの形体を把握象が野外にあり大型なため、長距離用三次元測定器を使用した。3 D実際の英彦山宝篋印塔を縮小して改刻前の姿を再現する。計測は、対



図14 英彦山宝篋印塔復原模型



図13 英彦山宝篋印塔3D データ

が当初から彫刻されていたか否かが不明なため、 塔に倣って花弁のみで構成している(図14) ととした。本河内の宝篋印塔の種子の拓本を取り、 等の意匠部分はレーザー加工機で出力し、基礎等は塑像で制作するこ て英彦山のものに組み込んだ。 することができた(図13)。これを三次元出力するには、 |の穴(計測不可能な部分)を補修する必要がある。そこで塔身や基壇 如意宝珠がある請花については、 豪潮作の他の宝篋印 それをデータ化し データ上の大

# 彦山三所権現御正体

彦山三所権現御正体と廃仏毀釈

仏形式の御正体は、平安から鎌倉初期では像は鏡板に鋲止めし、 なる像容表現を見せる特色ある御正体として重要であり、 い彦山権現の信仰資料としても貴重である」と記している。なお、 めて稀な神像御正体であるとともに、肉取り豊かで、神像特有の森厳 彫りの深い衣えもん紋表現などにも同様のことがいえる。大形できわ 上がった細い眼の面差しは古様な神像に共通するところであり、かつ 文化庁文化遺産データベースではその希少性について「眺のやや吊り 鋳銅板に神像(坐像)と二重火炎光背を鋲止めした懸仏形式である。 仏像ではない神像の御正体は稀である。国指定文化財となっており、 彦山三所権現御正体》があげられる。この御正体は、三 宝篋印塔の他に明治期に改変された英彦山修験道美術のひとつに 二面の円形の かつ数少な 背面

される形式へと変化しているため、

本御

正体は

前期のものとされている。(図15上段

英彦山の三岳には、

神仏習合の考え方

本地地

に鈕を鋳出すのが通例であり、鎌倉中期以降では像は鏡板にホゾ止め

現)-阿弥陀如来、

者にとって、北岳の尊格は天忍穂はあるないは、

耳尊のからと

(彦山三所権現御正体)銅、金、錫 鎌倉時代 (彦山三所権現座像(部分))江戸時代 土佐光淳《彦山垂迹曼荼羅(部分)》1759年 《彦山三所権現御正体復原》プロンズ、金、錫 2016年 各径45cm

手観音、南岳は伊邪那岐 尊 (俗体権現)-釈迦如来で からそれぞれ三つの尊格が重なっている。修験 中岳は伊邪那美尊(女体権現)-千 (法体権 鎌倉 垂; 図15 彦山三所権現御正体 鎌倉時 代・英彦山三所権現座像(部 江戸時代·土佐光淳 彦山垂迹曼荼羅(部分) 1759 年・知足美加子 英彦山三所 権現御正体復原 2016年

形として表現したものである。

尊を祀る北岳であった。この御正体は、これらの神仏習合の概念を造めった。この中で最も尊重されたのは天照大神の子である天忍穂耳

これら三面の御正体は、近代になり英彦山山内の別々の場所から発 県されている。天忍穂耳尊像は英彦山神宮(奉幣殿保管)、伊邪那岐尊 像は標高一一九九mの英彦山山頂にある上宮から平成三年の台風被害 の際に見出された(光背は紛失)。その後、中腹にある下宮から伊邪那 の際に見出された(光背は紛失)。その後、中腹にある下宮から伊邪那 の際に見出された(光背は紛失し鏡面のみ)が発見された。これには「彦山下 宮御正体 勧進大千房」という陰刻銘があり、英彦山下宮の御正体で あったことが明らかになった。

僧形の天忍穂耳尊は最も保存状態がよく、二重の頭光と身光が打ちとれた銅板製の火炎光背も残っている。表情は威厳とともに一種の出された銅板製の火炎光背も残っている。表情は威厳とともに一種の出された銅板製の火炎光背も残っている。表情は威厳とともに一種の出された銅板製の火炎光背も残っている。表情は威厳とともに一種の出された銅板製の火炎光背も残っている。他にも神道と仏教が組み合れる本地垂迹思想の反映と推測される。他にも神道と仏教が組み合れる本地垂迹思想の反映と推測される。他にも神道と仏教が組み合わされた「神仏習合」の独特な意匠がある。銀色の錫がかけられている本地垂迹思想の反映と推測される。他にも神道と仏教が組み合わされた「神仏習合」の独特な意匠がある。銀色の錫がかけられている円形の鋳物は、神道の「鏡」と仏教の「月輪」のイメージが重なっている。

伊邪那美尊像については現在紛失しているため、御正体の神像表現

を参考にして作られたとされている《彦山垂迹曼荼羅》(一七五九年)を参考にして作られたとされている《彦山垂迹曼荼羅》(一七五九年)を参考にして作られたとされている《彦山垂迹曼荼羅》(一七五九年)を参考にして作られたとされている《彦山垂迹曼荼羅》(一七五九年)を参考にして作られたとされている《彦山垂迹曼荼羅》(回16)の影響を受けているとされる平安時代の《線刻千手観音鏡像》(図16)の影響を受けているとされる平安時代の《線刻千手観音鏡像》(図16)の影響を受けたものと筆者は考えている。

においては、対象の全てではなく、その中心となるものや頭部を壊すの通り、明治元年の布告は神仏習合を禁じるものであった。廃仏毀釈三つの像の保存状態と発見場所に関係していると筆者は考える。前述準じている。これらの造形表現の中にみられる神仏習合思想の割合が、準じている。これらの造形表現の中にみられる神仏習合思想の割合が、



けられた神像と火炎光背は遺棄されたと考えられる。 もともとの安置場所である下宮に置き、神仏習合的な意匠が複数見受 伊邪那美尊像の手に蓮華が配されていたことも、神仏混淆の表象とし て忌避された原因と見受けられる。鏡面部分のみを神道の意匠として

図があったのかもしれない。 古来より最も尊格が高い北岳の天忍穂耳尊像を守ろうとする神宮の意 習合を想起させる意匠はないが、仏像として破壊の対象となったはず 中で、大日如来種子が現存することに注目し、神仏混淆の有無が破壊 は神像の意匠に準じているため遺棄せず、 いことから「廃仏毀釈を避けるために隠されていた」と推測される。 である。しかし天忍穂耳尊の面は改変されず、かつ最も保存状態がよ の線引きだったと推測しており興味深い。天忍穂耳尊像の場合、神仏(38) 失し、像自体は鏡面に再度鋲止めされている。このことから、仏教的 な光背のみが意図的に取り外されたと推測される。伊邪那岐尊像自体 狭川真一は、 三面のうち上宮内で守られていた伊邪那岐尊像は火炎光背のみが紛 廃仏毀釈によって本地仏が破壊された宝満山磨崖仏の 上宮に安置したのだろう。

## 復原プロセスと考察

成した。御正体は接触調査が難しい国指定文化財であり、かつ鍍金が で、筆者の方で残された火炎の形状から破損部分を推測し、原型を作 背は銅板を切り出されており、火炎部分の多くが破損している。そこ 失われた信仰対象の再現を目的として制作を行った。御正体の火炎光 彦山三所権現御正体と後述する不動明王立像は、研究のみではなく

> りが非対称性であり、これが表情に複雑な深みを与えていることがわ 造を行った。《天忍穂耳尊像》の蝋型のレタッチを通じて、眉頭の彫 可のもと、非接触型の3Dスキャナで計測し、三次元出力後、 残っているため直接型を取ることができない。今回は英彦山神宮の許 かった。

現に倣い装飾は最小限に抑えることとした。 現座像》《線刻千手観音鏡像》を参考にして成形を行った。向かっ て 左手に蓮華を、右手には火炎宝珠を持たせ、伊邪那岐尊像の簡素な表 と、天忍穂耳尊の身体部分、さらに《彦山垂迹曼荼羅》《彦山三所 《伊邪那美尊像》の神像部分は残存しないので、 伊邪那岐尊の頭部

の中に金色の神像が浮かび上がるような効果が得られた(図15下段?) る。また九州国立博物館の光学的調査によって、鏡面に残った銀色の 物の鏡面と光背に錫を引き、 箇所は錫(すず)であることが明らかになっている。 元には金箔が残っており、 表情の彫りを若干深くし、 とから、天忍穂耳尊像よりも表面の凹凸が鈍っている。そこで、顔の 《伊邪那岐尊像》は、厳しい気象下にある上宮に安置されていたこ この像が鍍金されていたことがわかってい 天忍穂耳尊に近づけた。伊邪那岐尊像の手 神像に金箔をはったところ、銀色の月輪 復原においても鋳

# 不動明王立像

# 不動明王立像と廃仏毀釈

不動明王は行者を守り導くものとして、修験道において重要視され

を直接仏像に縛り付けているものがあった。(図17上段右)てきた。英彦山に残された数少ない不動明王像の中で、破損した光背

度が高く力強い。この彫刻が何らかの形で、英彦山や長寿寺の不動明 がっていると考えられる。彫刻的には苗村神社の不動明王立像の完成 像の光背の火炎の形状、 明王を他に探したところ、 天台系の可能性が高い。これらの不動明王と英彦山は天台密教でつな(42) 神社境内には日吉山王の十禅師社が勧請されていることを考慮すると のと共通するものが多い。長寿寺は比叡山延暦寺の末寺で天台宗であ 手を前方に置く姿勢は独特であり、 的である。通常不動明王立像の左手は、体躯の横に置かれている。左 一の作り手に影響を与えたのではないだろうか。 この不動明王立像(鎌倉時代)は、衆生救済の象徴である羂索を持つ 苗村神社がある滋賀県には、天台宗の本山である比叡山があり、 (天台密教の修行を行った豪潮の宝篋印塔が建立されている)。ま 図17下段右)に存在することがわかった。これらの不動明王 体の正中線近くまで下方に突き出している姿態が特徴 不動明王の表情と姿勢・瓔珞は、英彦山のも 滋賀県の苗村神社と熊本県の長寿寺(木原 このような造形の特徴をもつ不動

明王の胴体に固定しているため光背下部のホゾが剥き出しになってい接結びつけている造形は稀である。光背を高い位置に持ち上げて不動が欠損し、不動明王の腰に紐で括り付けられていた。光背を仏像に直この不動明王立像は、発見時、両足がひざ下で折れていた。左腕は

《不動明王立像復家》千本杉 2016年H70cm (長寿寺 不動明王立像) 《苗村神社 不動明王立像》

図17 不動明王立像 鎌倉時代・苗村神社不動明王立像・長寿寺不動明王立像・知足美加子 不動明王立像復原 2016年

を直接仏像に背負わせた帰結であると筆者は考え

この不動明王の両足の破損の原因は、

ている。廃仏毀釈の際、

破壊されたのは仏像部分

る。

王の光背は迦楼羅焔という。迦楼羅は鳳凰のようではなく光背だったのではないだろうか。不動明

たため、脚部に負担がきて両足が折れたと考えると辻褄があう。不動明王の光背の上部には迦楼羅の頭部が彫刻されていることが多い。遊楼羅の頭部部分を遺棄することで、像全体を破壊したとみなしたのが、一般である。 もし最初に足が破壊されていたならば、倒れている仏像にがして、故意に光背を結びつける必要性があるだろうか。廃仏毀釈後に、迦楼羅頭部を排除して短くなった光背を持ち上げ仏像に紐で括っため、脚部に負担がきて両足が折れたと考えると辻褄があう。

# 二復原プロセスと考察

本不動明王の素材は針葉樹であり、おそらく杉だったと考えられる。本不動明王の素材は針葉樹であり、おそらく杉だったと考えられる。英に行生のものたちに水を与え、里の人々の信仰と寄進を集めてきた。この信仰を支えたのは、水を生み出す山内の樹木、特に杉である。英この信仰を支えたのは、水を生み出す山内の樹木、特に杉である。英として里のものたちに水を与え、里の人々の信仰と寄進を集めてきた。として里のものたちに水を与え、里の人々の信仰と寄進を集めてきた。として里のものたちに水を与え、里の人々の信仰と寄進を集めてきた。として里のものたちに水を与え、里の人々の信仰と寄進を集めてきた。を当修験者は修行および山内環境整備の一環として、樹木を植えていた。英彦山八合目付近には「千本杉」といって、山伏たちが四五〇年た。英彦山八合目付近には「千本杉」といって、英彦山神宮の協力により、被害を受けたり。今回の復原にあたって、英彦山神宮の協力により、被害を受けたり。今回の復原にあたって、英彦山神宮の協力により、山内に大手本杉を提供してもらっている。

意識しないとこの形は彫り出せないことがわかった。三所権現を想定の不動明王の眉間には三つの丸い突起があり、復原の過程で、かなりにあると考え、向かって左に衣文を膨らませて配置を決定した。現存の新明王立像の立脚は、彫刻的な観点からほぼ体躯重心に近い位置

している。 は英彦山に縁の深いものである。古式の方法に倣い、接着は膠を使用

明している。自然崇拝は神の依り代として巨岩、 鬼が手植えしたという伝説が残る「鬼杉(樹齢約一二〇〇年)」、修行 を重んじる考え方があり、(51) を通じて顕現するという思考を生み出し、神仏習合思想へと繋がって 対象としてきた。霊木によって仏像を彫るということは、仏が神(木) 田邊三郎助は、「霊木化現説」と神仏習合思想の関係を次のように説 まれており、 英彦山杉による建築「板倉(安土桃山)」は傾斜のある複雑な仕口で組 行われた。英彦山には相当数の木彫仏像が存在していたと考えられる。(48) 荒彫りした仏像等が出現したと、田邊は述べている。英彦山には草木 いったという。霊木性の強調として、立木仏や鉈彫りの仏像、 廃仏毀釈時、神兵数十名によって、 山内に木に関する高い技術が存在したことを示している 木を山外に持ち出すことへの忌避があった 木製仏像仏具の焼却が大規模に 巨木、水(滝)などを



図18 不動明王立像(部分) 2016 年

は素材を活かし塗装を施さなかった(図17左)。 における木への崇敬と植林(木材活用)文化を伝えている。千本杉は風における木への崇敬と植林(木材活用)文化を伝えている。千本杉は風の一環として植林した「千本杉」「行者杉」の存在は、英彦山修験道の一環として植林した「千本杉」「行者杉」の存在は、英彦山修験道

### おわりに

宝篋印塔と比較し、請花に八つの如意宝珠があることを新たに見出し と否定の境界を精査することで、修験道文化の輪郭を明らかにした。 たと推測した。五大として、正面から左回りに地(四角)、水(円)、火 く「五大思想を暗示させる仏教遺物」とするための造形的工夫を施し ている燈籠は稀である。英彦山修験者は、この塔を単なる燈籠ではな ている。実際の方位として、円形(日光)は東方、半月形(月光)は西方 剛界五仏種子を削り、火袋として「四角、 た。次に火袋改変の宗教的根拠を明らかにした。英彦山の塔身は、金 表象が積極的に否定されていることがわかった。豪潮が制作した他の 潮作の宝篋印塔を取り上げた。この改刻では、 道禁止令によって改変された意匠と、その表象の分析を行った。容認 (三角)、風(半月)、空(団-中心の宝珠)と配置し、この塔が仏教に帰 に位置しており、燈籠の体を成している。しかし背面に三角形を配し 第一章では、明治期に燈籠として塔身、基壇、反花を改刻された豪 本研究は、英彦山修験道美術の復原を通して、廃仏毀釈および修験 円、三角、半月」を造形し 「種子」と「蓮華」の

依すること示す表現を、造形の中に巧みに取り入れていた。さらに英 向かって左に西方の阿弥陀如来(キリーク)が刻まれていたと想定した。 の配置について、英彦山における北岳への信仰と、南面北座説、移築 変していることは、急進派の神兵の暴挙への対抗策とみることもでき 伏は、「仏教の教義そのもの」ではなく、「仏教の権威や価値を荘厳す 切如來神力」等の経文要約部分を残したことである。つまり英彦山山 彦山山伏の特別な意図が反映されている点は、 天忍穂耳尊像は保存状態がよいことから、僧形仏像としての破壊を免 光背や蓮華、神像が同面に造形された神仏混淆の表象が意図的に省か 釈の影響と各面の発見場所の違いについて考察を行った。その中で、 かって右に東方の不空成就如来(ウン)、背面に北方の阿閦如来(アク)、 方位と北方遥拝を重視し、 をしていない大興善寺宝篋印塔の配置を根拠として推測した。実際の していたことが明らかになった。さらに、英彦山宝篋印塔塔身の種子 る。当時の山伏たちが仏教・修験道不滅の祈りを宝篋印塔の造形に託 る表象」を中心に改刻したと結論づけた。視認性の高い部分のみを改 れるため、深く隠されていたと推測した。 純粋な神像として英彦山上宮に置かれた。伊邪那美尊像は、蓮華をも れたことを明らかにした。明治期に、伊弉諾尊像は光背を排除され、 った神像と光背が排除され、神鏡として元の英彦山下宮に置かれた。 第二章では、 彦山三所権現御正体について、意匠の分析から廃仏毀 塔身正面に南方の宝生如来(タラーク)、向 「猶是塔堅固不滅、一

第三章では、不動明王立像について、羂索を持つ手を前に突き出す

る、木への崇敬と植林文化について述べた。 その後の両足の損傷をまねいたと推測した。また英彦山修験道におけと脚部の破損個所の分析から、廃仏毀釈時に光背(迦楼羅)の破壊が、造様から、滋賀県苗村神社との関連の可能性を示した。この像の光背

以上の修験道美術の改変の分析および復原を通して、修験者達の「信仰対象を破壊しなければならないという矛盾と葛藤」を読み取ることができた。国家神道に歩み寄るための改変の中に、仏教・修験道工とができた英彦山修験者だちの智慧と技術がある。今回の復原のうで理解できた英彦山修験者だちの智慧と技術がある。今回の復原のうち、彦山三所権現御正体と不動明王立像は新たな信仰対象として、奉幣殿再建四〇〇年護摩焚きの際公開された。現在は奉幣殿に祀られている(図21)。二〇一七年二月「わが国を代表する山岳信仰の遺跡で、幣殿再建四〇〇年護摩焚きの際公開された。現在は奉幣殿に祀られている(図21)。二〇一七年二月「わが国を代表する山岳信仰の遺跡で、修験・仏教・神道の在り方を考える上で重要」として国指定史跡に登録されている。一度失われた文化を再興することは困難だが、今後も縁されている。一度失われた文化を再興することは困難だが、今後も縁されている。一度失われた文化を再興することは困難だが、今後も縁が直美術に残された先人の偉業を観察・熟考し、文化継承のひとつの手掛かりとしていきたい。

### 註

(1) 慶応四年(一八六八)三月十七日、神祇事務局は諸国神社に仕える(1) 慶応四年(一八六八)三月十七日、神祇事務局は諸国神社に仕える

ばれる事態が明治七年(一八七四)ごろまで続いた。

- (2) 太政官布告第二七三号、明治五年(一八七二)九月十五日「修験宗ノ儀自今被廃止本山当山羽黒派共従来ノ本寺所轄ノ儘天台真言ノ両本宗へ帰入被 仰付候条各地方官ニ於テ批旨相心得管内寺院へ可相本宗へ帰入被 仰付候条各地方官ニ於テ批旨相心得管内寺院へ可相上、教部省ニ可申出候事」
- (3) 主に建築分野において「復元(失われたものをかつての姿どおりに
- 版一九九四年二四五~二四九頁
  、五年一一一~二一五頁、広渡正利『英彦山信仰史の研究』文研出
  、五年一一一~二一五頁、広渡正利『英彦山殉難大祭委員会一九
- (5) 「由緒ならびに、鰐口、梵鐘、仏具等の類、委細書付け、来る二〇日までに差し出されたし」「神仏混淆を廃止されたので、別当・社僧できこと。還俗の主、神主・社人等の称号に改め、神道を以て勤仕するこの服装は、当分、風折烏帽子、浄 衣白差さし貫ぬきを着用するこの服装は、当分、風折烏帽子、浄 衣白差さし貫ぬきを着用するこの服装は、当分、風折烏帽子、浄 衣白差さし貫ぬきを着用するこ

- 身舎利の功徳を集めた四十句からなる(国史大辞典)。金塗小塔を造立し諸国に分けた。「宝篋印陀羅尼」とは一切如来の全のので、中国五代末期の顕徳二年(九五五)、呉越王銭弘俶は八万四千基の
- (8) 寛政十二年(一八○○)、国主(細川侯)は豪潮が諸国の大名に請迎されないよう、彼に九州の外に出ることを禁じた。石田豪澄『豪潮されないよう、彼に九州の外に出ることを禁じた。石田豪澄『豪潮
- (9) 熊本県、大分県、佐賀県、福岡県、長崎県、愛知県、京都府、神宗潮律師の研究』日本講義社一九五三年六一〜七六、一九二〜一九『豪潮律師の研究』日本講義社一九五三年六一〜七六、一九二〜一九日、東京都 に (9) 熊本県、大分県、佐賀県、福岡県、長崎県、愛知県、京都府、神九百
- (10) 北島雪山(一六三六~一六九七年)、秋山玉山(一七〇二~一七六四年)らと共に「肥後の三筆」と称えられる。
- (11) 永松譲二『豪潮』城野印刷一九七二年一八三頁
- (12) 熊本県の西巌殿寺、長寿寺は、二〇一六年四月の熊本震災により
- (13) 長崎ではキリスト教の禁教令により元和・寛永年間(一六一五~一次四四)の間に多くの仏教寺院が建立された。春徳寺は教会の跡地に大四四)の間に多くの仏教寺院が建立された。春徳寺は教会の跡地に
- (4) (7)前掲書一八三頁
- 園二八箇所を寄進した。その一つに「豊前国彦山」がある。国役免(15) 養和元年(一一八一)に後白河法皇は今熊野神社に対して全国の荘

駒澤地理一五、一九七九年二○頁した。長野覺「山岳宗教(修験道)集落-英彦山の構造と経済的基盤」以た。長野覺「山岳宗教(修験道)集落-英彦山の構造と経済的基盤」

- 彦山修験道の歴史地理学的研究』四九○頁 (16) 宝永七年(一七一○)の総人口は三○一五人であった。長野覺『英
- (17) 宝篋印塔各部名称に関しては、「日本大百科全書(小学館)」を参考
- (18) 灯籠の火をともす所
- 年二三二~二三二頁(1)関忠夫「宝珠の造形意匠」東京都国立博物館紀要一〇、一九七五
- (20) 宇野廉太郎『豪潮律師の研究』日本講義社、一九五三年七一~七二頁
- 九年三一四頁 (21) 長野覺「修験道の歴史と現状」『神仏習合と修験』新潮社、一九八
- (22) (19)前掲書二三五頁
- (23) (20)前掲書三一四頁
- (24) 「日田市・月出山岳の仏塔、天台密教の占星術刻む。高僧・豪潮の
- (25) 天子南面説ともいい、北極星のように天の中心にいる天子が、北の界る東にあたるため、向かって右が優位となる。西方浄土説が日の昇る東にあたるため、向かって右が優位となる。西方浄土説を背にして南方の臣下に向かうという古代中国の考え方。天子の左

- 中央には「北岳」の祭神である天忍穂耳命が配されている。 (26) 英彦山は中岳山頂の上宮神殿に三峰の神が合祀されており、その
- (27) Faro Focus3D X 130を使用。
- カーニニ〇頁 の、伊邪那岐尊像-鏡面径四四・八㎝ 井形進「美術工芸資料」『英の、伊邪那岐尊像-鏡面径四四・八㎝ 井形進「美術工芸資料」『英の、伊邪那岐尊像-鏡面径四四・九㎝、伊邪那美尊像-鏡面径四三・四
- のである。上方二ヵ所に釣手環をつけ、堂内に懸け礼拝する。(29) 御正体は懸仏ともいい、円形板に仏像等のレリーフを取付けたも
- (3) 文化遺産データベース http://bunka.ni.ac.jp/db/heritages/detail/166195(二○一七年十二月十二日確認)
- (31) 平安時代より始まった仏・菩薩を本地とし、神を衆生救済のため
- (32) 伊邪那美尊像鏡面には「大檀那」「左衛門尉藤原能直 三国守護につと籠字状銘文があるが、井形進は能直(大友氏の祖)の三国守護につきに、伊邪那美尊像鏡面には「大檀那」「左衛門尉藤原能直 三国守護」
- 一九九三年九頁 権現と守護天童を安置したという。添田町役場『彦山流記』葦書房橋の水晶石で、般若窟に天下った後、四十九窟に御正体を分かち、角の水晶石で、般若窟に天下った後、四十九窟に御正体を分かち、
- 那は柄杓を持っている。(34) 快慶作《富俊那立像》(一二三〇年)における釈迦十大弟子の宮楼

- (35) 仏教における月輪とは満月であり、完全無欠であることの象徴
- (36) 東京国立博物館 http://www.tnm.jp/modules/r\_free\_page/index\_php?id = 1591(二〇一七年十二月十二日確認)
- (37) 拙著「3Dデータ化による修験道美術の再現-英彦山今熊野窟を中
- 存協会二〇一六年六九頁 (38) 狭川真一「宝満山磨崖仏と廃仏毀釈」『都府楼四八』古都大宰府保
- ったと考えられる。四三年)はいずれも険しい環境内にあり、廃仏毀釈の対象にならなか四三年)はいずれも険しい環境内にあり、廃仏毀釈の対象にならなか(39) 英彦山今熊野窟の月輪大梵字(一二三七年)や、玉屋窟磨崖仏(一三
- (4) 鋳造は鋳造家の石上洋明、3D計測・出力は九州大学学生(河田尚
- (41) 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課(美術工芸·民俗係)古川史彦山修験道館保管 像高四四·六㎝(22)前掲書二二五頁 英樹材 寄木造 彫眼 彩色 鎌倉時代 英彦山神宮所蔵 英
- (43) 木材などを接合する際、一方の端部に作る突起。

隆からの斟簡(二〇一六年八月二三日付

(4) 慶長五年(一六〇〇)、徳川家康面前で裁決された英彦山の独立を保障する条文には「当山のこと、先規の旨に任せられ、守護不入、保障する条文には「当山のこと、先規の旨に任せられ、守護不入、

- 在した。
  (45) 英彦山には標高で区切られた四土結界(常 寂 光土、実報 壮 厳土、(45) 英彦山には標高で区切られた四土結界(常 寂 光土、実報 壮 厳土、
- (4)3D計測・切削加工機出力(MDX-540Roland)は九州大学学生(宮田市は)に依頼した。
- 一四九頁界)」の儀式。村上龍生『英彦山修験道考』海鳥社一九九九年八八~界)」の儀式。村上龍生『英彦山修験道考』海鳥社一九九九年八八~の一四九頁
- (48) 広渡正利(4)前掲書二四八頁
- (4) 和田一雄「英彦山の建築」『増補英彦山』 葦書房一九七八年九七八
- (5) 田邊三郎助編集『神仏習合と修験』新潮社一九八九年七○~八二
- \*本研究は JSPS 科研費 16K02314 の助成を受けている。鋳造関連経費

(ともたり・みかこ 九州大学芸術工学研究員准教授)